

5. 幼若永久歯における生活歯髄切断法を考える

瀬尾歯科クリニック 瀬尾 令 士

萌出途上にある永久歯は未だ咬合線に達しておらず、歯根の形成途上にあり、解剖組織学的、生理学的、且つ機能的にも不十分であり、いわゆる、未成熟な歯牙である。しかも、この時期の幼若永久歯は自浄作用効果が低い上に食物残渣の停滞を招き易く齧食や外傷の罹患をこうむる危険性が高いことから、何らかの歯髄処置が必要となる症例が数多くみられる。

日常、我々は、根未完成歯の歯髄処置に際して、可及的に歯髄を保護することによって、生理的な根の発育を促し、病巣の治癒効果を期待する。アペキシゲネーシスから施術するのが通常である。

そして、その術式として、根管口下部で歯髄を切断する生活歯髄切断法が最も多く用いられているのは周知の通りである。

しかしながら、臨床の中で何らかの傷害を持って訪れる幼若永久歯歯牙の状態を診てみると、根未完成時期に何らかの歯髄処置への既往を有した歯牙が多いことに驚く。

無造作に施された充填、修復物のために著しい歯牙の破物崩壊をきたし二次感染を招き、更に重篤な歯周組織炎や根尖病巣へと移行した結果、正常な発育が阻害されている幼若永久歯は多くみられる。

このような惨さんたる症例を診る毎に、未完成時期における初期治療の重大性を再認識すると共に心に重い痛みを感じるものである。

今回、頻繁に行われている根未完成歯の生活歯髄法について、若干の問題点を惹起しながら、改めて検討を加え本法の治療効果について再度、考えてみたいと思う。

6. 舌癖はいかに治すべきか

医療法人伊東会 伊東歯科医院 伊東 泰 蔵

歯科臨床において、現在までは歯牙、顎骨、等の硬組織に関する治療が主であったが、口腔内外の形態に大きな影響を与えるであろう軟組織の問題、つまり舌の機能を知る事も重要になってくる。

今回は特に歯列に影響を与える、口腔習癖の中で舌突出癖（舌癖）について検討してみたいと思う。舌癖とは、異常嚥下癖ともいわれていて口輪筋やオトガイ筋を強く緊張させ、舌を前方に突出させ上下の歯の間にはさまったままで嚥下することである。

この治療法には2通りあり、舌の訓練を行うことで正常な嚥下を指導する筋機能療法と習癖除去装置といって、舌側弧線装置にクリブを付けて用いる方法とがある。そこで、比較を行いながら、舌癖はいかに治すべきかを考えてみたいと思う。